

京都大学	博士 (医 学)	氏 名	北 井 豪
論文題目	Impact of New Development of Ulcer-Like Projection on Clinical Outcomes in Patients With Type B Aortic Dissection With Closed and Thrombosed False Lumen (スタンフォード B 型偽腔閉塞型急性大動脈解離患者における Ulcer-Like Projection の出現が臨床経過に与える影響)		
<p><b>【背景】</b> 偽腔閉塞型急性大動脈解離は急性大動脈解離の一亜型で、偽腔開存型解離とは、その臨床像や予後が異なると報告されている。特に、スタンフォード B 型偽腔閉塞型急性大動脈解離は降圧を中心とした内科治療で良好な予後が期待できるとされている。一方で、一部には経過中に解離が進行し予後不良となる症例が存在する。現在まで、ulcer-like projection (ULP)の出現が解離の進行に関係することが報告されているが、B 型偽腔閉塞型解離患者において、ULP と予後の関係についての検討は未だ十分になされていない。そこで、本研究では B 型偽腔閉塞型解離患者における ULP 出現が臨床経過に与える影響について検討した。<b>【方法・結果】</b> 1986 年から 2008 年までに当院に入院した B 型偽腔閉塞型急性大動脈解離患者連続 170 例を対象とし、画像所見・臨床経過を後ろ向きに解析した。発症後 30 日以内の死亡率は 0.6%であり、遠隔期（追跡期間 7.1±4.9 年）に 9 例の大動脈破裂を含む 31 例の死亡があった。170 例の実測生存率は 1,5,10 年でそれぞれ 99, 89, 83%であった。30 日以内の ULP 出現は 62 例(36%)に認め、ULP の出現が見られた群では、ULP の出現が見られなかった群に比べて有意に生存率が低かった(P=0.037)。また、ULP の出現は、大動脈関連事象（大動脈破裂、偽腔開存型大動脈解離への進行、大動脈瘤 化(≥60mm) または大動脈手術) の有意な増加と関連を示した (P&lt;0.001)。さらに、胸部下行大動脈近位部に見られた ULP は、他部位の ULP に比べて有意に多い大動脈関連事象と関連した(P&lt;0.001)。多変量解析では、発症時の大動脈最大径(Hazard ratio, 3.55; p&lt;0.001)、及び胸部下行大動脈近位部での ULP 出現(Hazard ratio, 3.79; p=0.003)が大動脈関連事象の独立した予測因子であった。<b>【考察】</b>本研究では、経過中に ULP を認めた例では ULP を認めなかった例と比較して生存率・大動脈関連事象回避率共に有意に低く、また、ULP の出現は大動脈関連事象の独立した危険因子であった。一般に、B 型偽腔閉塞型解離は保存的治療のみで予後良好な疾患として認識されているが、長期的にみると、進行して重篤な合併症を来す例や、手術が必要となる症例も少なからず存在する。国際大動脈解離登録試験(International Registry of Acute Aortic Dissection: IRAD)では、B 型偽腔閉塞型解離の 16%で経過中に進行を認めたと報告されており、本研究と同率であった。進行例の中でも大動脈瘤破裂や切迫破裂などは、未だに手術成績が不良であり、進行する可能性が高い症例に対して早期に治療介入することで、予後を改善できる可能性がある。本研究では、ULP が出現した例の中でも胸部下行大動脈近位部の ULP は進行する確率が高いことが示され、このようなハイリスク症例に対しては、今後大動脈ステントグラフトなどの早期介入が有効である可能性が示唆された。<b>【結論】</b> スタンフォード B 型偽腔閉塞型急性大動脈解離患者において 30 日以内の新たな ULP が出現した場合、大動脈関連事象の合併が多く、嚴重な注意が必要である。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

スタンフォード B 型偽腔閉塞型急性大動脈解離は、内科治療の施行により予後良好であると報告されてきたが、経過中に進行し予後不良となる症例も存在する。血管造影や CT における潰瘍様突出像;ulcer-like projection (ULP) の出現が解離の進行に関係すると報告されているが、ULP と長期予後の関係についての検討は十分になされていない。そこで、B 型偽腔閉塞型解離連続 170 例を平均 7.1 年観察し、ULP の出現が臨床経過に与える影響について検討した。結果、ULP の出現が見られた群では、ULP の出現が見られなかった群に比べて有意に生存率が低く、大動脈関連事象が有意に多かった。さらに、胸部下行大動脈近位部の ULP を認めた例では、他部位の ULP に比べて大動脈関連事象が有意に多かった。多変量解析では、発症時の大動脈最大径、及び胸部下行大動脈近位部の ULP 出現が大動脈関連事象の独立した予測因子であった。

一般に、B 型偽腔閉塞型解離は短期予後は良好と認識されているが、長期予後は良好ではない。進行例のうち大動脈瘤破裂や切迫破裂などは未だに手術成績が不良であり、ハイリスク症例に早期治療介入することで、予後を改善できる可能性がある。本研究により、ULP が出現した例の中でも胸部下行大動脈近位部の ULP は進行する確率が高いことが示され、大動脈ステントグラフトなどの早期介入が有効である可能性が示唆された。

以上の研究は偽腔閉塞型大動脈解離の病態の解明に貢献し、大動脈解離の診療に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士 ( 医学 ) の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成 25 年 2 月 27 日実施の論文内容とそれに関連した研究分野並びに学識確認のための試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日： 年 月 日以降